京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3 年計画の 2 年目)

1. 研究課題

「システム内存在としての世界についてのアートを媒介とする文理融合的研究」

Research in ‘totally-systematized world’: media-art, humanities, and natural science

2. 研究代表者氏名

三輪　眞弘

Masahiro MIWA

3. 研究期間

2019 年 4 月-2022 年 3 月(2 年目)

4. 研究目的

　現在、われわれ人類は人為的エネルギーに支えられた高度テクノロジーの只中で生きており、一見「自然」や「環境」や「心」と見えるものすら、システムなしに存立し得ない状況に至っている。本研究はこの認識から出発する。そして生命や心さえ含む地上の全存在が巨大システムに組み込まれていくこの時代の相貌につき、　「サイバネティクス」「テクノロジー」「メディア」「情報学」を切り口とし、　芸術創造に携わる申請者が媒介となることで人文学系と自然科学系の知見の綜合をはかり、　学知の認識を紙媒体だけでなくビデオアートや音楽作品の制作という感性的次元において発信する可能性を探る。これが本研究の目的である。つまり本研究は　①全人類的な問題についてのアートを媒介とする文理融合研究の実践モデルを示し、かつ　②学知を感性メディアを通してより直接的に社会へと接続しようとするものである。なお「システム」についての申請者の考えについては『三輪眞弘音楽藝術 全思考 一九九八～二〇一〇』(アルテスパブリッシング、2010 年) を参照されたい。

We are now living in a totally systemized, high-technology world which is completely dependent on electrical energy, and even things that we regard as ‘Nature’ or the ‘Environment’ or the ‘Human Spirit’ could not continue to exist without this system. In this project, characteristics of the contemporary world will be researched in terms of cybernetics, technology, media and information theory. The overall purpose of this research is to synthesize knowledge of both natural science as well as the humanities, and to create media-based art works inspired by this research.

5. 本年度の研究実施状況

本年度は 4 回のズーム研究会のほかに、これまでの議論を触媒として制作されたオンライン・イベント「ぎふ未来音楽展 2020 三輪眞弘祭 ー清められた夜ー」(9 月 19 日）をライブ配信し、「集えない時代」の意味を問うた。このイベントは特設サイトを設けた（英語版もあり)。当日リアルタイムのみの中継であったが、視聴回数は 3156、 全体の 5%が海外からの視聴だった（アメリカ、インドネシア、ドイツ、イギリス、オーストリア、台湾など)。また公演当日のウェブサイト訪問者は 2583 人（のべではなく、個別ユーザ数)、ページビュー数 9819 回である。また 8 月 28 日にはオンラインでプレイベント：「プロローグ「音楽の終わりの終わり」は、ここからはじまる――」を中継した。また研究班での議論に基づく論考『「第九」- 再び抱き合えるか』(8 月 4 日 朝日新聞朝刊全国版・論考）を発表、また三輪のイベントとセットの形で 9 月に発行された『音楽の危機』（中公新書）は四大新聞を含む 15 を超えるメディアの書評等で取り上げられ、1 月 1 日（22 時～）のＮＨＫ・ＦＭで坂本龍一により紹介された。また三輪と岡田による動画「コロナ時代の未来の音楽」を制作して Youtube にアップした。なお 9 月 19 日のイベントは朝日新聞 12 月 17 日「2020 年の回顧」欄（音楽）において片山杜秀氏により「今年の三点」に選ばれた。さらには 9 月の公開イベントが『佐治敬三賞』に、そして公開イベントを対象として三輪眞弘が『サントリー音楽賞』に選ばれるという、ダブル受賞の快挙を成し遂げた。

6. 本年度の研究実施内容

2020-06-05 オンラインによる音楽はいかにして可能か？ 発表者 三輪眞弘 情報科学芸術大学院大学

2020-06-21 ルーマン社会学紹介 発表者 藤井俊之 人文科学研究所

2020-08-28 ぎふ未来音楽展 2020 三輪眞弘祭 プレトーク ライブ配信 発表者 三輪眞弘 情報科学芸術大学院大学 コメンテーター 岡田暁生 コメンテーター 前田真二郎 情報科学芸術大学院大学 コメンテーター 松井茂 情報科学芸術大学院大学

2020-08-30 プレトーク総括討論 発表者 岡田暁生

2020-09-19 ぎふ未来音楽展 2020 三輪眞弘祭 ー清められた夜 ライブ配信 発表者 三輪眞弘 情報科学芸術大学院大学 発表者 松井茂 情報科学芸術大学院大学 発表者 前田真二郎 情報科学芸術大学院大学

2020-11-01 動画『コロナ時代の未来の音楽』制作 発表者 三輪眞弘 情報科学芸術大学院大学 コメンテーター 岡田暁生

2021-03-02 人工生命とバイオアートをめぐって 発表者 岩崎秀雄 早稲田大学

7. 共同研究会に関連した公表実績

『ぎふ未来音楽展 2020 三輪眞弘祭 プレトーク』(ライブ配信：8 月 28 日）および『ぎふ未来音楽展 2020 三輪眞弘祭 ー清められた夜』(ライブ配信：9 月 19 日)。双方とも特設サイトを設けた（英語版もあり)。動画『コロナ時代の未来の音楽』(youtube）を制作

8. 研究班員

所内･

岡田暁生、瀬戸口明久、佐藤淳二、藤井俊之、上尾真道

学外

三輪眞弘(情報科学芸術大学院大学)、松井茂(情報科学芸術大学院大学)、伊村靖子(情報科学芸術大学院大学)、佐近田展康(名古屋学芸大学)、岩崎秀雄(早稲田大学)、山崎雅史(株式会社ＮＴＴデータセキスイシステムズ) 、前田真二郎(情報科学芸術大学院大学)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数（必須）	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者（40歳未満）	若手研究者（35歳以下）	大学院生	総計	外国人	若手研究者（40歳未満）	若手研究者（35歳以下）	大学院生
学内（法人内）	1	6	0		1	0	23			5	
国立大学	1	1			1		3			2	
公立大学	2	4					18				
		(1)					(5)				
私立大学	1	1					6				
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関											
民間機関	1	1					5				
外国機関											
その他											
計	6	13	0	0	2	0	55	0	0	7	0
		(1)	(0)	(0)	(0)	(0)	(5)	(0)	(0)	(0)	(0)

（）は女性で内数

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文（単著・共著）	1			
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文（共著）				
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文（単著・共著）				
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文（共著）				
⑤国外の機関に所属する者のみの論文（単著・共著）				

共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名
音楽の危機	岡田暁生	R2.9	中公新書

11. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

12. 次年度の研究実施計画

研究会での人文学の先端的議論を触媒としてアート作品を制作し、社会に問うことが本研究班の中心課題であるが、来年度は「バイオ／バイオアートと時間」を中心主題に据える。細胞時計を専門とする科学者（２名)、バイオアートの実践者および研究者（3 名）を共同研究の講師として予定している。そして次年度も班長の三輪および班員の松井茂・前田真二郎・佐近田展康の共同制作による音楽映像イベントを企画中である。またこれまでの議論を本媒体の形でまとめていくが、本研究班の性格上、論文集ではなく写真やエッセイやインタビュー等を活用した形式を考えている。

13. 次年度の経費

		開催回数	国内出張旅費（延べ人）	支出予定額
国内旅費	研究会参加費	6	24	480000
	一般旅費			
海外旅費	渡航旅費			
	招へい旅費		3	150000
謝金（講演謝金、研究協力者金、その他の謝金）				120000
消耗品等経費				0
その他				0
合計				750000

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

引き続き今年度もマルチメディア的な形式で研究会の議論を社会発信する。音楽映像によるイベントのほかに、2020 年度に引き続き Youtube 動画によるレクチャー、そして書籍媒体によるとりまとめを構想する。